

天は神の栄光を語る



キリストの誕生を
知らせた星

導入

マタイが書き記した福音書（マタ 2,1-12）によると、メシア、つまり救い主の誕生は、ある星によって知らされました。昔から、この星について、多くの人々が不思議の念にかられてきました。しかし、いくら考えても、どんな仮説をつくっても、納得できるような答えが出ませんでした。

ところが、日に日に発展する天文学と、コンピュータの力を合わせた結果、この星が何であったかということが分かっただけではなく、私たちは自分の目でこの星を見ることが可能なものになったのです。

この記事では、**Frederick A. Larson** 博士の研究の結果を短く紹介したいと思います。なお、キリストの誕生を知らせた星についてもっと詳しく知りたい方には、<http://www.bethlehemstar.net> に発表されている **Frederick A. Larson** 博士自身の記事（英語）を読むことをお勧めします。

星についての聖書の教え

キリストの誕生を知らせた星について語る前に、まず、誤解をさけるために、星についての聖書の教えを理解しなければならないと思います。

まず、聖書は、明確に星占いを罪として定め、星が私たちの人生に何か影響を及ぼすことができるかのように、それらにおいて自分の運命を探したりすることは、偶像礼拝として、それを厳しく禁じています（ヨブ 31,26-28; イザ 47,13-14; 申 4,19; 申 17,2-5）。

しかし、神のわざである被造物全体と同じように、星も神様の「メッセンジャー」になることがあるということは認められています（ロマ 1,20; 詩 19,1-4; 知 13,4-5; ヨブ 9,7-9; エゼ 32,7-8; ヨブ 38,31-33; イザ 40,26; ルカ 21,25）。

キリストの誕生を知らせた星

☞ 「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。『ユダヤ

のベツレヘムです。預言者がこう書いています。「ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、**星の現れた時期**を確かめた。そして、『行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう』と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、**東方で見た星が先立って進み**、ついに幼子のいる場所の上に**止まった**。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。」マタ 2,1-12

この文書からキリストの誕生を知らせた星についていくつかのことが分かります。

1. 誕生を示すものであった
2. 王の身分を示すものであった
3. ユダヤの民族と関係があった
4. 他の星と同じように東に昇った
5. 占星術の学者の知っている時期に現れた
6. ヘロデは、星が現れたことを知らなかった
7. 星はある期間、現れつづけた
8. 占星術の学者は、南に向かってエルサレムへ旅していたとき、その先にあった
9. ベツレヘムの上に止まった

この情報は、キリストの誕生を知らせた星を探すに当たって、大事なヒントになります。しかし、それはまた、何かの星をキリストの誕生を知らせた星として認めるために、この星が、果たさなければならぬ条件にもなるわけです。

イエス・キリストが生まれた年の問題

イエス・キリストは、ヘロデが死ぬ前に生まれました（マタ 2,1；ルカ 1,15）ので、イエスが生まれた年を分かるために、ヘロデの死の年が重要であります。多くの教父たち（Ireneus, Clement of Alexandria, Tertulian, Origenes, Eusebius, Epiphanius など）は、イエスが紀元前 3～2 年の冬に生まれたと考えていました。しかし、Emil Schure は、ユダヤの古代史を書き記した Flavius Josephus (37-95) の本に書き記されているいろいろなデータに基づいて計算して、ヘロデは紀元前 4 年に亡くなったという結論を出しました。Emil Schure は、自分の研究を“History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ”という本の中で発表しました。この本の出版の 1897 年以来、ヘロデが紀元前 4 年に亡くなったとほとんどの学者に認められましたので、キリストの誕生は紀元前 4 年以前だったと思われるようになりました。

しかし、1966 年に、W.E.Filmer が、Emil Schure の研究結果を批判してから、それを疑う学者（Martin, Edwards, Keresztes, など）が増えています。

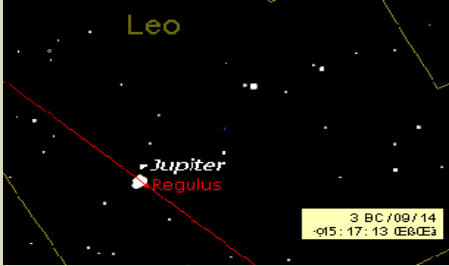
ヘロデの後継者であった 3 人の息子の生涯が、彼の死の年の問題に関するデータをもたらす一つの重要な源であります。現在知られている Josephus の文書によれば、3 人の息子の一人であったヘロデ・フィリップは、37 年間支配した後、ティベリウス治世の 20 年目に、つまり西暦 33/34 年に亡くなったということです。それを計算すると（（西暦）33 年間 +（紀元前）4 年間 = 37 年間）、フィリップは紀元前 4 年に継承したということになります。しかし、新しい研究の結果、1544 年以前の Josephus のすべての本には、「ティベリウス治世の 20 年目に」ではなく、「ティベリウス治世の 22 年目に」と書いてあるということが分かりました。つまり、フィリップが死亡したのは、西暦 33/34 年ではなく、西暦 35/36 年ということになり、継承したのは、紀元前 4 年ではなく、紀元前 1 年（（西暦）36 年間 +（紀元前）1 年間 = 37 年間）ということになるわけです。したがって、ヘロデが亡くなったのは、紀元前 4 年ではなく、紀元前 1 年であったということが分かります。

新しい王の誕生を知らされたヘロデは、2 歳までのすべての男の子を殺す命令を出しました。それによって、イエスは、その 2 年以内に、つまり紀元前 2 年か 3 年に生まれたということになります。したがって、教父たちが言っている通り、イエスが生まれたのは、紀元前 2～3 年の冬ということを疑う余地がないということが言えると思います。

今まで、このような間違いのために、間違った年の空が調べられたわけで、誰もキリストの誕生を知らせた星を見つけることができませんでした。

天の物語

これから、星の動きのシミュレーションができるソフトでできた映像を使って、紀元前3年以降から、紀元前1年までの間に、実は、空には、先の九つの条件を満たした星（天文現象）があったということを説明したいと思います。

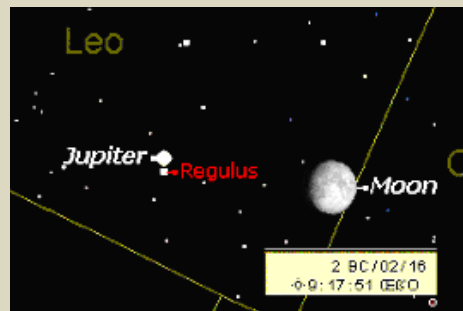
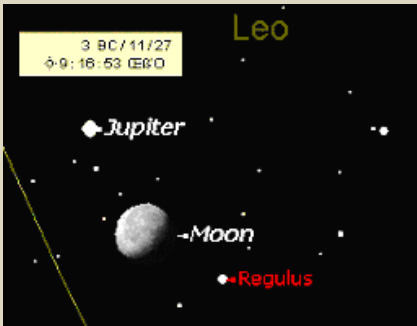


紀元前3年9月14日に木星（Jupiter）と Regulus という星との合（conjunction）が起きました。

太陽系の最も大きな惑星である木星は、昔から神々の王で天の支配者の星として考えられていました。

Regulus は、バビロニアで Sharu（王様という意味）と呼ばれ、ローマ人

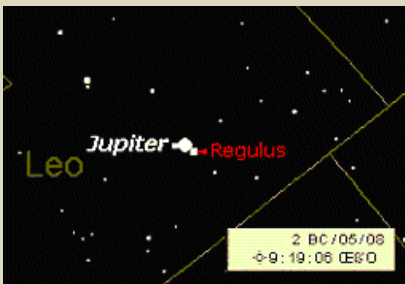
も Regulus を Rex（王様という意味）と呼びました。つまり、9月中の、ユダヤの新年が始まる時、王を示す二つの星が合となったのです。それだけは、あまり珍しいことではありません。木星と Regulus との合は、12年置きに起こります。けれども、その後、もっと珍しい現象が起きました。この現象は、昔の学者であって、いろいろな研究をしているうちのひとつとして、星の動きを観察していた占星術の学者たちの注目を引いたであろうと思われます。



Regulus から離れた木星が、紀元前2年2月16日に、Regulus のもとに戻って2回目の合が起ったのです。

そして、さらに木星は Regulus を通りすぎて、3ヶ月後に、また戻って、同年5月8日の3回目の合となったのです。

連続の3回の合は、12年毎に起こる1回の合よりも、ずいぶん珍しいことで

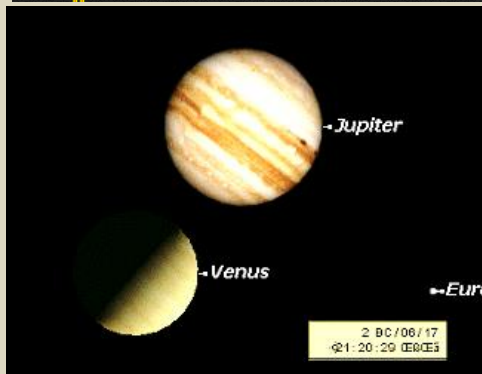


す。木星と Regulus の 1 回の合は、普段、5 ないし 6 回起こった後、3 回の合が 2 回起こります。つまり、3 回の合は 60 年間や 72 年間に 2 回起こります。確かに占星術の学者は、紀元前 15 年にも、そのとき空を観察していたならば、同じ出来事を見るチャンスがありました。けれども、今回は、木星と Regulus は前よりも近づいただけではなく、3 回の合の後に、さらに、非常に不思議なことが起こったのです。恐らく、それは、歴史上で初めであり、最後の出来事であったでしょう。



それは、Regulus から離れた木星が、数日後（紀元前 2 年 6 月 17 日）に、金星と合となったのです。それは、とても珍しい合でした。肉眼では、木星と金星が一つの星になったように見えました。

実は、木星と金星は、重なったのではなく、互いに「触れる」ほど近づいたのでした。近くから見れば、木星と金星は 8 に近い形を作ったのです。



太陽系において、最も大きな惑星と最も明るい惑星が、一つの光になって、今まで誰も空の上に見たことのない大きな光となって、どんな星よりも、力強く輝きました。それは、今でも多くのプラネタリウムで（勿論イエスの誕生と関係なしに）見せているほど、非常に珍しく、劇的な出来事でした。この出来事を見た占星術の学者は、

その直前に起こった木星と Regulus の珍しい動きの意味について考えはじめたのではないのでしょうか。

ユダヤの新年の初めに、しかも、ユダの部族と関連されているしし座 (LEO) の中で (創 49,9-10)、王の身分と関係ある星の 3 回の合の後に、最初の合 (紀元前 3 年 9 月 14 日) から計算すると、丁度 9 ヶ月後 (紀元前 2 年 6 月 17 日) に王を示す木星は、美と愛の女神を示す金星 (ビーナス、ウェヌス) と合となり、いつよりも接近し、力強く、誰にも不思議に思われたように輝いた、ということは、きっとユダヤ人の王が生まれたという意味であると解釈したのでしょうか。そして、準備ができ次第、エルサレムに向かって旅に出たのでしょうか。

まとめ

以上のような、紀元前3年9月からの木星の動きは、キリストの誕生を知らせた星の九つの条件の中から八つの条件を満たしているということを確認したいと思います。

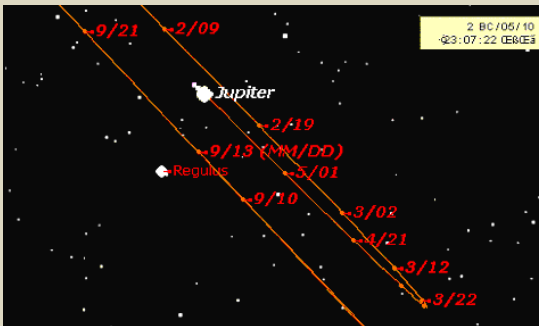
1. 誕生を示すものであった：木星と **Regulus** の最初の合から9ヶ月後に起こった木星と金星の合は、歴史上一番近くて、一番強い光を放ったこと。また、木星と **Regulus** が初めて合となった数日前に、乙女座において、太陽の光に包まれた新しい命の誕生を表す新月の現れ(8頁)
2. 王の身分を示すものであった：王様の星である木星と **Regulus**
3. ユダヤの民族と関係があった：しし座 (LEO)、最初の合はユダヤの新年の始まり
4. 他の星と同じように東に昇った：木星が東に昇る
5. 占星術の学者の知っている期間に現れた：木星と **Regulus** の最初の合は、紀元前3年9月14日；木星と金星の合は、紀元前2年6月17日
6. ヘロデは、星が現れたことを知らなかった：この現象は、珍しくても、長い間、注意深く、星の動きを見なければ、分からないものでした。木星と金星の劇的な合は、誰にも見えるものでしたが、その前後が分からなければ、そのメッセージを読み取ることができない出来事でした。でも説明を受けたヘロデは、星が現れた意味を全然疑いませんでした。そして、新しい王の誕生は、自分にとって大きな危険であると判断しました。非常に恐れた結果、2歳までのすべての男の子を殺す命令を出したのです。
7. 星はある期間に現れつづけた：ユダヤ人の王の誕生を知らせた天文の諸現象が起こった期間、つまり、紀元前3年9月14日から、紀元前2年6月17日までの期間
8. 占星術の学者は、南に向かってエルサレムへ旅していたとき、星はその先にあった：占星術の学者が出発したと考えられるときから、エルサレムについて(6ヶ月後)ときまで、木星の位置が以下のように変わりました。南へと進んでいます。



最後の条件

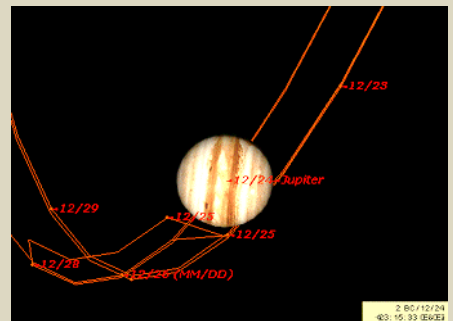
紀元前3年以降の木星の動きが、キリストの誕生を知らせた星のすべての条件を満たすためには、もう一つの条件が残っています、それは、この星が「ベツレヘムの上に止まった」ということです。

勿論、星はいつも動いていて、止まることはありません。同じように、逆戻りしたりすることはありません。しかし、地球から遠く離れているために、動かないように見える星をバックにして、ずっと動いている地球から見れば、他の星や惑星が逆戻りするだけではなく、止まっているように見えることもあります。それは、追い越されている車が、後ろに動くように見えるのと同じ現象です。

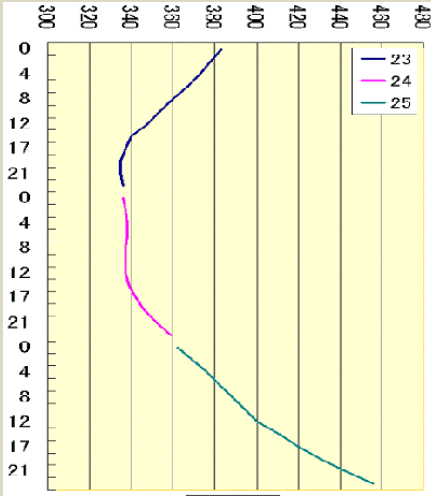


木星は、Regulus と3回合となったように見えたのは、実際に木星が逆戻りしたりしたためではなく、地球の位置が変わったためです。占星術の学者が、エルサレムにいた時、木星は、(地球の動きのために)「方向」を変えるところでした。そのために、

地球から見たら、動かないように見えたわけです。



また、別のデータに基づいて木星の動きをグラフで表わすと以下の通りになります。23日の午後5時から、24日の午後3時まで、木星が動かないように見えるということが分かります。



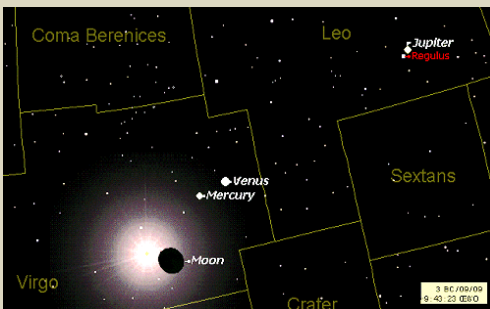
	23日	24日	25日
0時	383	336	362
2時	378	337	369
4時	373	338	376
6時	367	338	382
8時	360	337	388
10時	354	337	394
12時	348	337	400
15時	340	339	411
17時	337	342	420
19時	335	346	431
21時	335	352	443
23時	336	359	456

こうして、木星は最後の条件も満たしたわけです。

物語の続き

黙示録にも、以上の出来事を描いているような文書があります。

📖 「また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。竜の尾は、天の星の三分之一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。」黙示録 12,1-5



木星と **Regulus** がはじめて合となった数日前に、まさにヨハネが描いている場面を空に見ることができました。乙女座 (Virgo) において、太陽の光に包まれた新しい命の誕生を表す新月が現れ

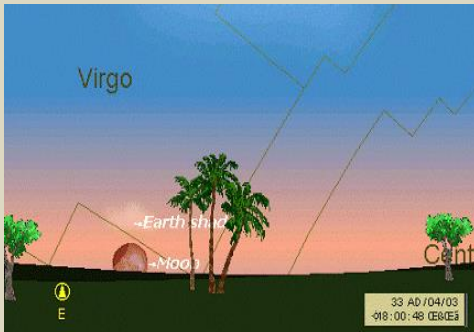
ました。不思議に、この話しの続きは、イエスが亡くなった日の空に見ることが出来ます。

聖書学とローマ帝国の歴史の最近の研究によって、イエス・キリストの死の年だけではなく、その日さえも分かりました。それは、西暦 33 年 4 月 3 日（金曜日、過ぎ越し祭）でした。ペトロの言葉から分かるように、この日、空の上には、誰にも分かるような、不思議なことが起こりました。

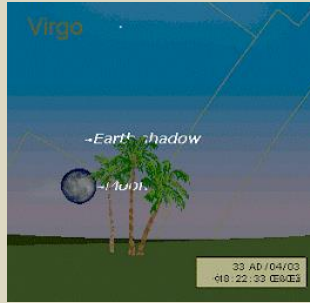
使徒ペトロはこう言いました。

☞ 「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。主の名を呼び求める者は皆、救われる。』イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりで。」
使 2,14-22

この日、太陽が暗くなったことは、ルカの福音書から分かります。



☞ 「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。」
ルカ 23,44-46



血に染まっているように見えた赤い月は、シミュレーションのプログラムのおかげで、自分の目で見る事ができます。この日、月が赤くなったのは、月食のためです。月の面には、赤くなっている地球の影が見

えます。

エルサレムにいる人々は、この月食を午後6時過ぎに見ることができましたが、実際には、この月食は、イエスがなくなった午後3時前からはじまったのです。

紀元前3年9月新月が太陽の光に包まれて、新しい命の誕生を知らせたときと同じように、イエスが亡くなった日の月食は、乙女座 (Virgo) の中ではじまりました。今回は、月は、満ちていました。「乙女の足元」(乙女座のすぐ近くで)、赤くなっている満月は、

成熟した命の死を表していると言えるのではないかと思います。

*

以上に描いた天文現象は、星の大スペクタクルであって、本当に、神のメッセージを伝えている空の物語であったのではないのでしょうか。しかも、誰でも見ることできたこの現象が表わす物語は、誰にでも「聞く」ことができ、誰も否定できないようなものでした。そのために、パウロは、詩編 19 編を引用しながら、次のようなことばを述べることでできたのでしょうか。「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。それでは、尋ねよう。彼らは聞いたことがなかったのだろうか。もちろん聞いたのです。『その声は全地に響き渡り、／その言葉は世界の果てにまで及ぶ』のです」(ロマ 10,17-18)。

まさに、詩編に書いてある通り、「天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す」(詩 19,1-4)。 神に感謝！